

弘前大学
広報誌

ひろだい

vol.
18
2012.3

特集 新学長に聞く

人の環、知の環で大学づくり。
新たな時代の価値の創造へ。

東北・北海道エリア初導入
手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」

[シリーズ] 花開く研究
被災した外国人の無事を願って
「やさしい日本語」で続けた支援
人文学部・社会言語研究室

[学内トピックス] 話題の広場から
第9回産学官連携功労者表彰(農林水産大臣賞)
を受賞
第11回弘前大学総合文化祭を開催
遠藤正彦弘前大学長退任 他



特集

新学長に聞く

人の環、知の環で大学づくり。 さらなる地域貢献を指向して 教養教育、国際化でも 新たな時代の価値の創造へ。

これまで医学部長、大学院医学研究科長、被ばく医療総合研究所長などを歴任した佐藤敬先生が2月1日、本学の第13代学長に就任しました。

『世界に発信し、地域とともに創造する』という弘前大学のモットーを胸に、どのような大学づくりをリードしていくのか。教育・研究・地域貢献など、さまざまな観点から次代への思い、抱負を語っていただきました。

——このたび新学長に就任された心境から、お聞かせください。

「きわめて重い職責で、やるからには全力を傾けて全うしなければ、との思いが強まっ

てきました。事務局スタッフとの気心も通じ、まわりの理解と協力あってこそその大学トップなのだ実感しています。さまざまな部門を担う教職員の皆さんと一緒に、あくまでも学生主体の大学運営を推進し、本学ならではの教

育と研究の深化を目指していきます」

——弘前大学としてのオンリーワンの価値は、どのようにして追求されるのでしょうか。

「私たちの大学には、これまで育んできた伝統と実績があり、それらをベースに、さらなる発展の可能性が無限に広がります。『世界に発信し、地域とともに創造する』というスタンスは不変です。人文科学・社会科学・自然科学を融合させ、多くの成果を社会へ還元する実践力で存在感を高めていきます。

とりわけ地域貢献の観点では産業界や行政、そして地元のコミュニティーなど多くの分野と結びつきを強めながら山積する課題の解決を図ります。また知の拠点として多様なニーズに応え、研究・開発・生涯学習の最前線をリードしたいと考えています。青森に根ざす大学としての使命を胸に、たゆまず新たな価値を創造していくことになります」

——学生主体という考え方に基づくと、最も重視したいポイントは何かですか。

「まず念頭に描くのは教養教育のさらなる充実です。これからの時代を見据えて質・多様性ともに高いレベルのカリキュラムを提供し、個々の全人的な成長を促す新機軸を打ち出したいですね。こういう方向性は人文学部・教育学部・医学部・理工学部・農学生命科学部、すべてに当てはまります。

高校で習ったことの延長ではない、ましてや専門課程に先立つルーチンな内容でもない、という点を入試広報の段階でもアピールする必要を感じます。幅広い知力と創造力、そしてコミュニケーション能力をトータルに培う機会を提供するには、マンパワーの有効な活用、学習環境の整備も不可欠です。

思考や感性を伸ばす内容、専攻を深める内容、実践に役立つ物事の見方・考え方・スキルが身につく内容…。これらは生きていく上での糧となり、自信の源ともなります。学生には目先の成果だけに囚われず、これからの自分を見つめて幅広く学び、スケールの大きな人材を目指して欲しいと思います」

——教養教育では外国語の位置づけも重要です。この点について、いかがですか。

「グローバルに通用する英語力を伸ばすことが、重要な取り組みの一つだと思います。語学の運用力に限らず異文化コミュニケーション、あるいは多文化共生といった状況で柔軟に対応できるリテラシーも確かなものに、

と願っています。しかしコンテンツの改編、教員の配置ほか、現場レベルで検討すべき点が多いのも事実です。だからこそ、より良い方向へ進むためにポジティブな発想・情熱・行動力を結集していく必要性を感じます」

——地域に根ざす教育・研究と関連づけると、国際化路線は、どう進展しますか。

「どの分野であろうと、思考もアクションも地球サイズの発想を取り入れながら深化・展開させていくのが理想です。ローカルであること。グローバルに指向すること。これらは矛盾する概念ではありません。それぞれの視座を複眼的に持つことで発想は豊かに広がり、社会へ還元できる成果も広がるでしょう。

国際化の一環として、世界各地からの留学生を、一人でも多く受け入れねばなりません。多様なバックグラウンドやメンタリティーを持つ学生が集うことで教育・研究の活性化、異文化交流が促され、ひいては全学のポテンシャルが高まると考えられます。国際化路線は、この弘前大学の魅力を高める有効な手立てです。もちろん本学が魅力的だからこそ多くの留学生が集い、国際化が進展していく、という好循環も生まれます。

また『ほかの国で勉強してみたい』とグローバルな指向を持つ学生に対し、留学先の選び方・現地での過ごし方・学んだ成果の活かし方など、さまざまな角度から疑問や関心に応じて希望をサポートする体制が整っています。海外への扉が開ける国際交流センターを、とどしどし利用してほしいと思います」

——国際交流の協定を結んでいる姉妹校は、どの位ありますか。

「まず大学同士の協定が26校と結ばれており、学部間協定は7校と結ばれています。アジア・オセアニア・北アメリカ・中南米・ヨーロッパ



パと、世界各地からの留学生を受け入れてきました。出身国も20カ国を数えるほどで、バラエティーに富んでいます。学部・大学院・連合大学院を合わせると、その数は計134人に上ります(2012年1月)。

海外から本学を目指す学生のために、国際交流センターでは、豊かな海外経験や専門性・博識を持つスタッフがキメ細かな運営に携わっています。留学生の受け入れを図るとともに、こちらから留学生を送り出すことに関しても積極的な取り組みが望まれます」

——青森の活性化へ向けて探究を進める上で、重視すべき点は何でしょうか。

「産業基盤の課題、人口や医療の過疎化、あるいは少子化・高齢化など地域が抱える実情を大局的かつ具体的に捉えるのが第一歩です。そうすれば課題の解決、ビジネス創出へ向けて現場レベルの発想と行動が生まれます。もちろん、個々の研究プロジェクトは自由かつ独創的なのが望ましい。こうした点をクリアした上で現場の人たちと同じ目線を持てるなら、貢献への道が拓けます」

——独自の地域密着型プロジェクトで、とりわけ注目される動きを教えてください。

「CO₂排出削減策の実用化、太陽光や風力で起こす電気エネルギーの自給率アップ、さらに新たな産業モデルの創出へ向けて北日本新エネルギー研究所が期待を集めています。すこやかな環境との持続的な共生が探られる昨今、白神自然環境研究所は、世界的に貴重なブナ原生林のフィールドへ根ざすリサーチ拠点という位置づけです。また原子力産業が立地する青森の最前線事情を踏まえ、原子力災害への緊急対応も視野に入れ、被ばく医療総合研究所がパイオニア的な取り組みを加速しています。



弘前大学長 佐藤 敬 (さとう けい)

1950年6月生まれ。北海道深川市出身。1979年3月、弘前大学大学院医学研究科を修了。医学博士。専門領域は、脳血管障害に関する病態因子の研究。弘前大学医学部長、大学院医学研究科長、弘前大学被ばく医療総合研究所長などを経て2012年2月1日、新学長に就任した。在学中はラグビー部に所属してフォワード・バックスとの連携の起点、スクラムハーフがポジションだった。「試合が終われば、敵も味方も超えてラグビーを愛する者同士」という「ノーサイド」が好きな言葉。

こうした話題とともに、かねてから青森の産業界をリードしてきた農林水産業の分野で食品の付加価値づくり、マーケティングの新展開を図る産学連携も活発です。本学で支援するベンチャー企業が地場メーカーとタイアップ。高血圧や肥満など生活習慣病に効果があるカボチャの粉末を配合し、オリジナルの麩を開発した実績も挙げられます」

——最後に、リーダーシップのあり方、「ひろだい」への思いをお願いします。

「どの取り組みにも言えることですが、携わる人たちが課題・目的意識・方法論を共有して数多くの成功体験を味わえるように…。そういう組織的な土壌というか、自由闊達で風通しの良い環境を創り上げていく先頭に立つのが私の役目なのだと自覚しています。

適材適所、それぞれのポジションで生まれる成果が一つ一つ積み上げられ、大学全体の価値が高まると信じています。例えば産学連携は、外部からの競争的な資金導入も不可欠なので、研究に励む先生方がイノベーション志向で高いモチベーションを保てるようなサポートの必要性を感じています。

時代のニーズに応えるプロジェクトは社会からの認知度、大学界におけるステータスへ直結して教育面への波及効果も計り知れません。「ひろだい」の求心力は高まり地元・青森をはじめ北海道、東北一円、さらに北陸など各地から学生が集うことでしょ



人間の手以上の複雑で繊細な動きを可能にする手術支援ロボット「ダ・ビンチ」



東北・北海道エリアで初導入

より精密・正確な手術で 患者の負担を軽減 学生の教育にも効果を発揮する 手術支援ロボット「ダ・ビンチ」

平成23年4月に手術支援ロボット「ダ・ビンチ」が導入され、同7月より前立腺癌の手術などに使用されています。ダ・ビンチ手術によって出血量が少量となり、術後の回復も短縮。学生への教育面でも大いに役立てられています。

海外に広がる ダ・ビンチの性能の高さ

「ダ・ビンチ」は、手術時の支援装置としてアメリカで開発されたロボット。前立腺癌、食道癌、心臓のバイパス手術の際、腹腔鏡手術をより精密に操作できるとあって、アメリカやヨーロッパでは10年以上前から導入されています。特に前立腺癌については、手術の8～9割に使用されています。アジアでも、韓国や中国、台

湾、シンガポールなどでは、日本よりも早く導入されました。

ダ・ビンチ手術の利点は、体内に差し込んだ専用器具が繊細な動きに対応するため手術時の出血量が少量で済み、その分術後の回復期間が短縮。周囲の臓器を傷つける危険も少ないため、根治性、尿禁制を含む機能温存にも優れています。

前立腺癌や膀胱癌、腎移植を専門とする本学泌尿器科の大山力教授は、以前

からダ・ビンチの性能の高さに注目し、早期導入を模索していました。

しかし、日本では厚生労働省の認可が下りないために海外から直輸入するしか方法はない状態。コストもかかるため、なかなか導入することができませんでした。

東北・北海道エリアで いち早く導入

2010年によくやく日本でも認可が下りることに。本学医学部附属病院では、昨年(2011年)の4月に導入。東北・北海道エリアでは、初めての導入となりました。

しかし、機械が設置されても直ちに活



入力装置「コンソール」。3Dのモニター画面を見ながら、コントローラーで操作。ペダルを踏めば、メスに電気が流れる

用とはいかず、ダ・ビンチを操作するためには、いくつかのトレーニングを行い、一定の基準をクリアする必要があります。

トレーニングには「オンサイトトレーニング」と「オフサイトトレーニング」の2種類があり、院内に設置されたダ・ビンチを実際にセットアップし、操作する練習(オンサイト)を行います。

オフサイトは動物を使つての実践練習。福島県須賀川に豚を使ったトレーニングセンターがあり、医師と看護師が泊り込みで訓練する予定でしたが、ここで思いもよらぬ事態が。須賀川は3.11 東日本大震災の被害が大きく、復旧のために延期を余儀なくされました。

期間は1ヶ月延びてしまいましたが、その後トレーニングを全てクリアし、7月14日に第1回目の手術が行われました。

精密・正確な操作で 患者の負担を軽減

ダ・ビンチを使つての手術は、医師が入力装置「コンソール」に座り、患者から数メートル離れた場所で遠隔操作によって行います。

モニターを覗くと画面は3Dになっており、人間の目と同じように立体視が可能。遠近感が非常によくわかり、電動メスを使った際に立ち上る煙はまるで目の前にあるかのようで、思わず避けてしまうほどの迫力があります。

コントローラーに人差し指と親指をはめ込み操作すると、長い棒状の4本の機



「ダ・ビンチ」のアーム部分。入力装置「コンソール」からの指示通りにぶれることなく正確に動く。



手術室の隣にあるモニタールーム。3D用の眼鏡をかければ、臨場感ある手術映像を目にすることができる

械が、まるで腕と手のように的確に動き患部を捉えます。

前立腺の手術の場合、前立腺は狭い骨盤の奥に張り付いているため開腹手術になると恥骨が邪魔になって尿道と膀胱の縫合が非常に困難であり、平均900～1000ccと大量の出血を伴っていました。

それがダ・ビンチを使用すると、体内での操作が可能であり、肉眼の10倍の視野を持つため繊細かつ正確。出血量は、50～100ccと10分の1で済み、患者の体への負担は大幅に軽減されます。

本学医学部附属病院では、これまで前立腺癌の手術が13例、婦人科での子宮の全摘出が数例、消化器科での脾臓の手術が1例行われてきました。

現在、保険が適用されないため(2012年3月現在)130万円程度の費用を自費負担していただいています。平成24年4月から、ダ・ビンチを使用した前立腺全摘除術が保険適応となる見通しなので、今後利用者は増加すると考えられます。



学生教育にも 効果を発揮するダ・ビンチ

ダ・ビンチは、学生や若手研究者の教育にも役立てられています。手術室の隣の部屋には見学のためのモニタールームが用意され、3D用の眼鏡をかけることで、術者と同様に画面が立体的になり、誰でも臨場感のある手術が見学できます。

また、同室の中にはダ・ビンチのトレーニングマシンが設置されており、糸を結

んだり、輪をかけたりとバーチャルトレーニングが可能です。

大山教授は、「迫力ある映像を見学し、その後バーチャルトレーニングをすることによって、学生たちは自分が今トレーニングしていることが、どのような場面で活かされるのかを理解しやすいと思います。また、隣の手術室に行けば実際に手術を間近で見学できますし、学生が疑似体験を織り交ぜることでより成長すると思います」と期待します。

昨夏には5、6年生を対象としたトレーニングを企画したり、ダ・ビンチをトレーラーに乗せて青森県内の病院への巡回体験企画も行われました。

これまでも、泌尿器科の手術では全国でも指折りの技術を持つ弘前大学医学部。ダ・ビンチを導入したことで、さらに技術に磨きがかかり、同時に人材育成にも大きく弾みがつきそうです。



弘前大学大学院医学研究科教授
大山 力 (おおよま ちから)

宮城県大崎市生まれ。1984年弘前大学医学部卒業。腎移植、前立腺癌、膀胱癌等を専門とし、東北大学や秋田大学などを経て弘前大学へ。2004年弘前大学大学院医学部研究科泌尿器科教授に就任。本学の東北・北海道で初の「ダ・ビンチ」導入に尽力。趣味は、釣りや愛犬を連れての散歩。モットーは、「患者さんの満足を第一に」。

ノーベル化学賞・白川英樹博士を招き特別講演会を開催

本学大学院理工学研究科では、2000年ノーベル化学賞受賞の白川英樹博士を招き、特別講演会を去る9月16日(金)に本学創立60周年記念会館コラボ大八甲田ホールで開催しました。

特別講演会は、同理工学研究科が、地域の子供達を対象に、勉学意欲や大学への進学意欲を高め、将来、地域と世界に活躍できる人材育成を目指すことを目的に毎年行っているサマ

ースクールの一環として開催されたもので、会場には県内高校生ら約120人が来場しました。

白川博士は、「私の歩んだ道～導電性高分子研究の三四年を振り返って～」をテーマに講演し、博士の少年期からの体験をもとに、自然現象への興味、それを積極的に学ぶことの重要性、ノーベル化学賞受賞での発見・発想ごぼれ話などを紹介しました。講演後は質疑応答が行われ、高校生から多数質問が寄せられました。



講演する白川博士

第3回「緊急被ばく医療国際シンポジウム」を開催

本学大学院保健学研究科では、「放射線被ばくにおける線量評価と防護」をテーマに第3回「緊急被ばく医療国際シンポジウム」を9月17日(土)、同研究科24講義室で開催しました。

同研究科では、多くの原子力関連事業所が集中している青森県における緊急被ばく事故に対する安全、安心の確保、原子力関連企業従事者の医療リスク管理システムの構築及び被ばく医療に対応できるメディカルスタッフの養成を目指し、平成19年度から緊急被ばく医療人材育成の取組みを開始。平成20年度からは文部科学省特別経費のプロジェクト事業として「緊急被ばく医療人材育成及び体制の整備」を実施しています。

3回目となる今回のシンポジウムは、本学被ばく医療総合研究所及び文部科学省科学技術戦略推進費「被ばく医療プロフェッショナル育成計画」と共催し、独立行政法人放射線医

学総合研究所の後援により開催したもので、関係機関から約100名が出席。本学の緊急被ばく医療への取り組みや国内外の緊急被ばく医療と福島事故、放射線被ばくにおける線量評価と防護をテーマに、AFRRI及びIAEAの他、国内の関係機関から9名のシンポジストを迎え、原子力災害時における緊急被ばく医療について世界的な視野から講演、討議が行われました。また、同研究科で実施している「緊急被ばく医療人材育成プロジェクト」の研究成果を含む17件のポスター発表も行われ、参加者からは活発な質疑応答を行い、緊急被ばく医療への国際的知見を深めました。

また、シンポジウム終了後のレセプションでは、本学学生による津軽三味線が演奏され、シンポジストら関係者と同研究科の教員が今後の連携推進に向けて情報交換を行い、交流を深めました。



本学学生と外国人講師



活発な議論が行われたシンポジウム

第9回産学官連携功労者表彰(農林水産大臣賞)を受賞

本学は、第9回産学官連携功労者表彰(農林水産大臣賞)を受賞し、9月22日(木)東京国際フォーラムにおいて開催された「第10回産学官連携推進会議」の産学官連携功労者表彰授賞式で、地方独立行政法人青森県産業技術センターとともに表彰されました。

産学官連携功労者表彰は、大学、公的研究機関、企業等の産学官連携活動において、大きな成果を収め、あるいは先導的な取組を行う等、当該活動の推進に多大な貢献をした優れた成功事例に関し、功績が顕著であると認められる個人又はグループ・団体の功績を称えることにより、産学官連携の一層の活性化を図るもので、今年で第9回目となります。農林水産大臣賞は、農林水産業及び関連産業の振興の視点から特に顕著な功績又は功労があったと認められる者に表彰されるものであり、本学は、「未利用水産資源から抽出したプロテオグリカンを利用した新産業の創出」の取組事例

で表彰を受けました。

今回の受賞は、これまで主に廃棄処分されていたサケの鼻軟骨から、高純度のプロテオグリカン(糖タンパクの一種で保湿性及び抗炎症作用等の多彩な機能を持つ注目の成分)を低コストで精製する技術を開発し、その応用研究を進めてきたことで、未利用水産物を有効活用した食品、化粧品、医薬関係品等の多様な分野で製品開発の展望が開け、さらに平成22年度からは(地独)青森県産業技術センターが事業推進の中心となり、地域資源を活用した製品の開発による新しい産業、雇用の創出が進んだことで、水産資源の多角的利用と、漁村地域を含む地域の活性化につながる事例として高く評価されました。

授賞式では、本学において本プロジェクトを総括してきた加藤研究・産学連携担当理事と(地独)青森県産業技術センター弘前地域研究所阿部馨バイオテクノロジー部長に農林



授賞式の様子

水産省農林水産技術会議事務局松田研究統括官から表彰状の授与があり、その後、記念撮影が行われました。また、9月21日、22日とブース展示も行われ、ブースに訪れた来場者は、研究内容等について詳細な説明を受け、熱心に見入っていました。

「2011年 弘前大学シニアサマーカレッジ」を実施

9月13日(火)、本年度で6回目の開催となった「弘前大学シニアサマーカレッジ」の修了証書授与式を行い、受講者ひとりひとりに修了証書が手渡されました。

本年度は「つがる今昔物語」をテーマに、弘前城築城400年記念事業として実施し、学内講師はもとより、りんご自然栽培農法の先駆者である木村秋則氏の特別講義や弘前ねぶた絵師による講義など、多彩な講師陣を迎え、充実した内容となりました。最終日、遠藤学長(当時)より、本学は、法人化後教育、研究並びに地域貢献を展開するため様々な取組みを行っており、6回目となる弘前大学シニアサマーカレッジは、その一環であること、また本年度は、



築城400年を迎えた弘前城の現地見学

南は九州、北は北海道の全国各地から113名の参加があり、全日程が無事終了し、今日の修了証書授与式を迎えられたことについて感謝の意が述べられました。



弘前ねぶた絵師による講義

引き続き行われたさよならパーティでは、つがる弁を用いて昔話を語る「津軽昔コグループ」による語り披露され、盛況のまま全日程を終了しました。

福島県浪江町と連携に関する協定を締結

9月29日(木)、東京電力福島第一原子力発電所の事故により町内の約半分が警戒区域に指定され、町民のほとんどが避難を余儀なくされている福島県浪江町と、連携に関する協定を締結しました。

本学は、文部科学省等の要請で3月15日から8月1日までに医師や看護師をはじめ職員延べ567人を福島県へ派遣し被ばくスクリーニング等を行ってきました。また、浪江町津島地区からの依頼で農地の土壌や植物などの放射線量調査を行った実績を踏まえ、組織間の合意に基づいた長期的な調査を行い、科学的なデータを後世に残す等町の復興支援のための協定締結を申し入れたところ、浪江町からは、除染を含む環境改善、健康調査等についても協力依頼の意が示されました。

調印にあたって、馬場浪江町長から「弘前大学と協定を締結できて大変心強く思っており、除染のみならず、町の復興・再生について指導・助言をいただき新たなまちづくりを目指したい」と、遠藤学長(当時)からは被災された方々へのお見舞いの後、「皆さんと一緒に考えて問題の解決に努力していきたい」と、それぞれ挨拶がありました。



固く握手を交わす遠藤学長(当時)(左)と馬場浪江町長(右)

平成23年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季学位記授与式を挙行

平成23年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季学位記授与式が9月30日(金)、事務局3階大会議室において行われ、34名に学位記が授与されました。



学位記を授与される卒業者

平成23年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季入学式を挙行

平成23年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季入学式が10月3日(月)事務局3階大会議室において執り行われました。



23年度秋季入学者

医学部保健学科開設10周年記念式典及び記念講演会を挙

本学医学部保健学科では、開設10周年を迎え、「弘前大学医学部保健学科開設10周年記念式典及び記念講演会」を10月17日(月)、医学部コミュニケーションセンターで挙

行了。本学医学部保健学科は、医学部附属の看護学校、助産婦学校、臨床検査技師学校、診療放射線技師学校の改組に理学療法学科及び作業療法学科が加わり、昭和50年に設置された弘前大学医療技術短期大学部と、昭和43年設置の弘前大学教育学部特別教科(看護)教員養成課程を起源とし、平成12年10月に弘前大学医学部保健学科として発足しました。

記念式典には学内外からの関係者ら約100名が出席。佐藤医学部長(当時)が式辞を述べ

た後、村田文部科学省高等教育局医学教育課長(代読:伊東文部科学省高等教育局医学教育課長補佐)及び三村青森県知事(代読:山中青森県健康福祉部医師確保対策監)から、祝辞が述べられました。

続いて行われた記念講演会では、遠藤学長(当時)が「弘前大学医学部保健学科の10年の歩みとこれからの展望」と題して講演を行い、保健学科開設までの苦労話からこれまでの歩みを紹介しながら、保健・医療系大学は今後ますます競争が激しくなること、本保健学科の差別化や特徴を明確にすべきであり、被ばく医療を教育・研究の柱の一つに加えて頑張っ



式辞を述べる佐藤医学部長(当時)

また、記念講演会終了後には、祝賀会が開催され、開設当時を知る保健学科退職教員らと同学科の教員による交流などにより、開設10周年を祝いました。

第11回弘前大学総合文化祭「テーマ『SPREAD』」を開催

第11回弘前大学総合文化祭が10月21日(金)から23日(日)の3日間にわたり、本学文京町キャンパスで開催されました。

今年のテーマ『SPREAD』は、総合文化祭に関わる人々の楽しさや、エネルギー等が来場された方に広まって欲しいという想いから掲げられました。さらに、『SPREAD』には、その頭文字を取り、Smile, Peace, Relaxation, Energy, Amusement, Dreamの意味が含まれています。笑顔、親睦、やすらぎ、活力、楽しさ、夢を来場された方にふりまき、ひいては東北全体、日本全体に広がるように、という願いが込められています。

オープニングフェスティバルでは、集まった大勢の観客を前に総合文化祭推進委員会委員長の遠藤学長(当時)が声高らかに開祭宣言し華々しくスタートしました。

期間中は、学生主体の模擬店でキャンパスは賑わい、学生の日頃の研究成果をもとにした実習や実験を直接体験できる「サイエンスの招待」をはじめとし、様々な研究発表がありました。さらに、「よしもと芸人お笑いライブ」も開催され、会場は大きな拍手と笑いに包まれました。また、教職員の芸術作品を展示した「職員芸術・造形作品展」や県内各地から計8チームが集まり、華麗な演舞を披露した「よさこい弘大」、文京町キャンパスを舞台に熱戦が繰り広げられた「駅伝大会」といったイベントの他に、一般来場者が参加できる「Let's enjoy BINGO!」や「ベストペア☆決めまSHOW!」、「大抽選会」など多彩な催しも行われました。

昨年同様、包括協定を締結している弘前市により行われた「地元産農産物販売、りんごジュース無料試飲会」や、青森で採れた海と山の幸の紹介及び販売を行った「鱒ヶ沢物産展

フェア」にも多くの来場者が訪れていました。本学後援会からの助成によるキャンパス内外を彩る幟、提灯も掲げられ、お祭りムードを盛り上げていました。

学生、教職員、地域住民が一体となり本学の更なる飛躍が感じられる3日間となりました。主な催しは次のとおりです。

【全学イベント】

Opening Festival/職員芸術・造形作品展/東日本大震災の記録～弘前大学から被災地へ～/よさこい弘大駅伝大会/Final Festival/学長主役イベント/花火

【弘大祭 オフィシャルイベント】

看板男子コンテスト～男気ふりまけ!きらめき☆タイム～/弘大グルメ選手権/Let's play the BINGO!
☆The Performers☆/Rock Festa-arrival-/“逆”運試し/よしもと芸人お笑いライブ
看板娘コンテスト～華ふりまけ!姫君たち～/なりきり!コスプレショー/弘大カラオケ王者決定戦
ベストペア☆決めまSHOW!/秋のイントロ祭/大抽選会/ソフトボール大会2011 他

【学部祭】

人文祭/教育祭/医学祭/理工祭/収穫祭



遠藤学長(当時)の開祭宣言



来場者で賑わうキャンパス



イベントの様子



弘前大学YOSAKOIサークル「焰舞陣」による華麗な演舞

第4回弘前大学国際シンポジウム「白神山地から新しい自然・生物資源利用を考える」を開催

本学白神自然環境研究所では、10月25日(火)に創立50周年記念会館みちのくホールで、第4回弘前大学国際シンポジウム「白神山地から新しい自然・生物資源利用を考える」を開催しました。

シンポジウムには、本学と協定校である中国・延辺大学の他、ロシア・極東国立農業大学の研究者をはじめ、国内の研究者らを招き、職員、学生及び市民ら約100名が参加し、新しい生物資源利用の可能性について理解を深めました。

第1部では「白神山地の環境特性」について弘前大学の教員4名が白神山地における動植

物や気候変化、人々の暮らしの関わり等について講演しました。第2部では「長白山周辺地域の生物とその利用」について延辺大学の教員5名が受粉昆虫やきのこ類等についての講演が行われました。また、第3部では「ロシアと日本での自然利用の新たな視点」について、極東国立農業大学と北海道大学の教員がロシアの農業事情や知床世界自然遺産におけるエコツーリズム等について講演が行われました。

続いてのパネルディスカッションでは、「極東アジアの豊かな自然を活用し、未来に残していくには」というテーマで日本・中国の研究者らによる活発な議論が展開されました。



活発な議論が展開されたディスカッションの様子

知の拠点形成プロモーション事業「日経ユニバーシティ・コンソーシアム」を開催

本学では、10月26日(水)、東京都千代田区大手町の日経ホールを会場とし、知の拠点形成プロモーション事業「日経ユニバーシティ・コンソーシアム『地域活性化を担う人材育成～世界自然遺産白神山地の自然のもとで育つ人・産業～』」を開催しました。

これは、世界自然遺産白神山地の豊かな自然を背景に、本学と包括協定を締結している弘前市が地域資源を生かした人材育成、地域産業の振興、東日本大震災復興への取り組みなどの情報発信を目的とし、日本経済新聞社との共催で行ったものです。

遠藤学長(当時)の開会の挨拶、葛西弘前市

長及び佐々木白神自然環境研究所長の基調講演に続いて、キャスター・エッセイストの福島敦子氏をコーディネーターに迎え、涌井雅之氏(造園家、東京都市大学教授)、見並陽一氏(東日本旅客鉄道 常務取締役)、葛西弘前市長、遠藤学長(当時)の5名により、『豊かな自然がはぐくむ地域産業と人材育成』をテーマとしたパネルディスカッションが行われました。267名の聴衆を前に、先人が築いた弘前の歴史をふりかえるとともに、激動する社会情勢の中で人材育成や地域産業の振興に向けた取り組み、世界自然遺産白神山地を有する津軽地域の活力を、広く発信しました。



パネルディスカッションの様子

「防災・日本再生シンポジウム」を開催

本学では、一般社団法人国立大学協会との共催により、地元自治体の協力を経て地域住民及び地元企業等を対象とした「防災・日本再生シンポジウム」を11月9日(水)に開催し、大学教職員、自治体関係者、一般企業、一般市民等約190名の参加がありました。

同シンポジウムでは、遠藤学長(当時)による挨拶の後、三村青森県知事(代読:青山副知事)の挨拶に続き、南條学長特別補佐から開催趣旨説明がありました。

その後、神本北日本新エネルギー研究所長

ら3名の教員による講演と、牛山足利工業大学長ら学内外6名のパネリストならびに4名のコメンテーターによる「日本再生プランと人材育成」をテーマとしたパネルディスカッションが行われました。「リスクの分散」、「再生可能エネルギー、食の地産地消」、「被ばく等の状況調査」、「地域視点での日本再生」の必要性が指摘され、また、「放射線」、「安全、リスク管理」、「技術経営」などの教育をカリキュラムに取り入れた人材育成が重要であるとの意見も出され、東日本大震災後の防災と日本再生、人材



会場の様子
育成について考える良い機会となりました。

農学生命科学部附属生物共生教育研究センター農場祭を開催

本学農学生命科学部附属生物共生教育研究センターでは、11月12日(土)、五所川原市金木町にある金木農場で「農場祭」を開催しました。

この農場祭は、地域の方々との結びつきを深めるため毎年行っているもので、今年度は金木農場で行われました。農場生産物販売コーナーでは、本学藤崎農場産のリンゴ、野菜、クルミ、ぎんなん及び金木農場産の米及び牛肉が販売されました。

販売された牛肉は「弘大アップルビーフ」とい

う産業廃棄物・リンゴの搾りかすを飼料にした牛肉で、大学発の地域ブランド化を目指し、平成23年2月に商標登録をしています。今年6月には「弘大アップルビーフ」特別生産牛舎も完成し、牛舎内の換気設備などは太陽光発電を使用するなど自然エネルギーで電力が賄われています。

また、会場では、学生によるクレープの販売や金木観光物産館「マディニー」、つがる市稲垣町「おかずや」及び弘大生協も出店し、多くの来場者で賑わいを見せました。



弘前大学名誉博士称号授与式を挙行

本学では、学術文化又は国際交流の発展に多大な貢献があり、本学の教育研究の進展に寄与した功績が特に顕著であった方に対して弘前大学名誉博士の称号を授与しており、11月11日(金)、宮田亮平氏(東京藝術大学学長)と安達弘潮氏(本学名誉教授・現東北女子大学教授)に、12月8日(木)、湯原哲夫氏(東京大学大学院特任教授)に、12月21日(水)、明石真言氏(独立行政法人放射線医学総合研究所理事)に弘前大学名誉博士称号を授与しました。

宮田氏は、弘前大学創立60周年記念行事に際し、そのモニュメントとして「幸せのリング」と題して「イルカ」をモチーフとした大型金工作品の制作と記念学術講演を行ったほか、このたび本学で新たに創設した弘前大学学術特別賞のためのモニュメント制作を行うなど、本学の教育研究への貢献、地域の芸術レベルの向上、本学の知名度向上等に著しく貢献しています。

安達氏は、学生を中心とした弘前大学フィルハーモニー管弦楽団を創出し、指導を行い本学退任後も常任指揮者として同管弦楽団の発展に尽力されています。

湯原氏は、本学北日本新エネルギー研究所の前身である北日本新エネルギー研究センターの設置に向けて尽力され、低炭素社会実現に向けて再生エネルギー及び分散エネルギーの重要性を指摘する等、北日本新エネルギー研究所の方向性の決定に当たって主導的な役割を果たしてこられました。



名誉博士記を授与される宮田亮平氏



名誉博士記を授与される湯原哲夫氏

明石氏は、本学の緊急被ばく医療体制の整備や、高度救命救急センター設置や被ばく医療総合研究所設置における教員選考においても大きく貢献されました。



名誉博士記を授与される安達弘潮氏



名誉博士記を授与される明石真言氏

モニュメント「シュプリングェン」除幕式及び平成23年度 弘前大学学術特別賞授与式を開催

本学では、弘前大学学術特別賞が創設され、11月11日(金)にモニュメント「シュプリングェン」除幕式及び平成23年度弘前大学学術特別賞授与式が執り行われました。



学術特別賞には、独創的かつ完成度の高い数編の論文を対象とする「弘前大学学術特別賞(遠藤賞)」と、独創的かつ著者の将来性を伺わせるに足る1編の論文を対象とした「弘前大学若手優秀論文賞」があり、ともに本学における研究水準の向上に著しい貢献をした論文を顕彰することを目的としています。

今年度は遠藤賞2名、若手優秀論文賞2名の受賞があり、遠藤賞受賞者へは副賞として宮田学長自ら制作された、モニュメントのレプリカのトロフィーが贈られました。また、両学長からの挨拶後、各受賞者よりスピーチがあり、会場からは大きな拍手が贈られていました。受賞者は次の方々です。

1. 弘前大学学術特別賞(遠藤賞)

所属部局	職名	受賞者名	受賞テーマ
理工学研究科	教授	吉澤 篤	[アモルファスブルー相発現の分子設計および無秩序→秩序相転移に基づく表示機能の創成]
医学研究科	准教授	森 文秋	[神経難病の病理発生機序と病変進展様式の解明]

2. 弘前大学若手優秀論文賞

所属部局	職名	受賞者名	受賞対象論文
農学生命科学部	特別研究員	尾崎 拓	[Mitochondrial m-calpain plays a role in the release of truncated apoptosis-inducing factor from the mitochondria]
保健学研究科	助教	細田 正洋	[The time variation of dose rate artificially increased by the Fukushima nuclear crisis]

国立大学法人弘前大学主催音楽会 弘前大学フィルハーモニー管弦楽団演奏会 —八戸地域弘前大学同窓会創立10周年記念公演—を開催

本学では、11月23日(水・祝)、弘前大学フィルハーモニー管弦楽団による演奏会を八戸市公会堂にて開催しました。

弘前大学フィルハーモニー管弦楽団は、本学全学部の学生で構成されたオーケストラで、昭和44年(1969年)に結成され、創立42年を迎えます。

平成15年度から始まった本学主催のこの演奏会ですが、今年度は八戸地域弘前大学同窓会創立10周年を記念して行ったものです。

当日は、八戸市内を始めとする青森県南各地域から約400名の来場者があり、安達弘潮名誉教授の指揮の下、S. ラフマニノフ作曲の交響曲第2番ほか計3曲が演奏され、来場者は弘前大学フィルハーモニー管弦楽団の迫力ある演奏に耳を傾けていました。



演奏する弘前大学フィルハーモニー管弦楽団

平成23年度 弘前大学研究成果公開シンポジウム 「東日本大震災復興に向けた弘前大学の研究展開」を開催

本学は、『平成23年度 弘前大学研究成果公開シンポジウム「東日本大震災復興に向けた弘前大学の研究展開」～これまでの活動と今後の新エネルギー・環境研究への取組～』を11月26日(土)に東京都港区、12月9日(金)に青森県弘前市内で開催しました。

本シンポジウム開催は平成23年2月に続き2回目となり、今回は今年3月に発生した東日本大震災における本学の原子力災害に対する活動状況と新エネルギー・環境研究についての発表を行い、一般市民・企業関係者など両会場併せて約230名の参加がありました。

会場からは、「東日本大震災以前から被ばく

医療等の取組を行っている弘前大学の先見性に驚いている」という声があったほか、それぞれの講演に対して、「放射能に関して青森県の農産・海産物に影響はないのか」、「津軽地域における過去の地震の歴史的データはあるのか」、「地熱発電の電気の買取はどうなるのか」等の質問、「青森県産品は放射能汚染が無く大丈夫だということを弘前大学が中心となってアピールしてほしい」、「放射性物質の種類や危険性等を国民に対して分かりやすく表にした資料を本学が作成してはどうか」等の意見も活発に出されるなど、今回のシンポジウム開催により弘前大学が取り組んでいる研究成果

を首都圏並びに地元で広く発信する良い機会となりました。



シンポジウムの様子(弘前会場)

「弘前大学チェルノブイリ視察団」がチェルノブイリを視察

福島県浪江町との連携協定を締結している本学では、今後の福島県浪江町の復旧・復興の方策の参考とするため、「弘前大学チェルノブイリ視察団」をウクライナへ派遣しました。

視察団は、佐藤医学研究科長兼被ばく医療総合研究所長(当時)を団長とし、江羅財務・施設担当理事事務局長(当時)ほか、医学研究科、保健学研究科、農学生命科学部、被ばく医療総合研究所の教員と総務部職員で構成され、12月1日から6日までの日程でチェルノブイリ原子力発電所ほかウクライナ各地を視察しました。

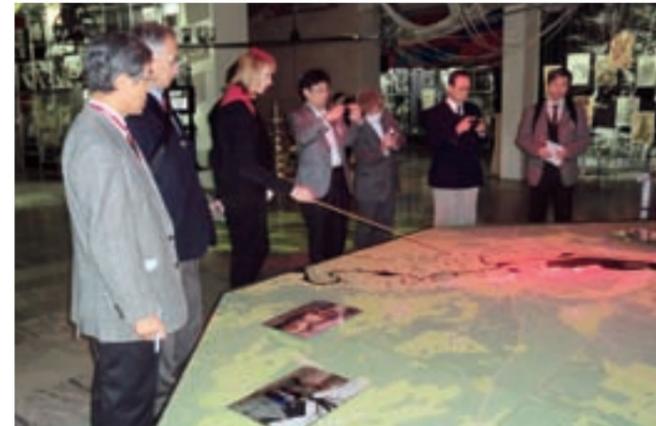
この視察団は、文部科学省、外務省及び在ウ

クライナ大使館の協力のもと、チェルノブイリ原子力発電所30km圏内への立入りをはじめ、放射線医学研究センター、チェルノブイリ博物館等を視察し、原子力事故による汚染状況やそれらへの対応、被ばくした住民への放射線の影響等、各施設から今後の福島県浪江町の復旧・復興への対策に参考となる多くの情報を得ることができました。

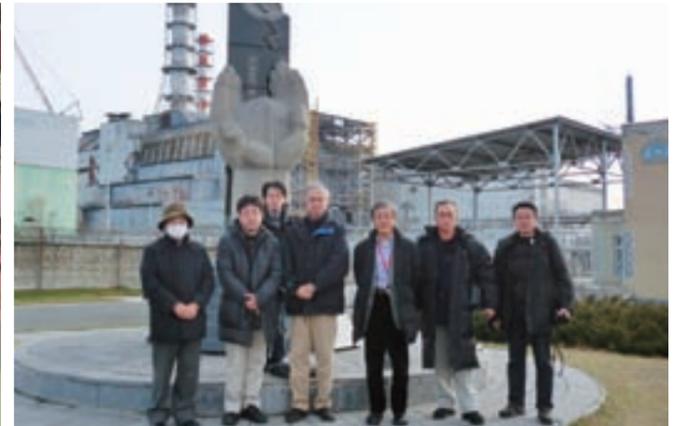
また、放射能汚染地区から避難してきた住民を支援する団体との意見交換も行われ、当時、チェルノブイリ原子力発電所で働いており、事故後はがれきの撤去などに携わった人の証言

や、放射能汚染により強制的に移住させられた人々の証言等、貴重な情報を得ることができました。

さらに、ウクライナ滞在中、坂田東一在ウクライナ大使と意見交換をする機会を得、ウクライナと日本の協力関係や、ウクライナにおける原子力発電の現状、被ばく者への政府の対応、日本との教育・研究における連携活動等、日本とウクライナとの関係について多くの貴重なご意見を伺うことができました。



チェルノブイリ博物館で説明を受ける視察団



煙突が見える奥の建物が事故のあったチェルノブイリ原子力発電所4号炉(石棺)

遠藤正彦弘前大学長退任

1月31日(火)、遠藤正彦弘前大学長が、10年間の任期を終えて、学長を退任されました。同日、本学幹部職員等を前に退任の挨拶を行い、在任の10年間で振り返るとともに、佐藤敬新学長の下に結集して、更なる発展を願うとエールを送りました。

そして、事務局職員から花束が贈られ、職員の見えない拍手が鳴りやまない中、10年間学長を務めた弘前大学を後にしました。



退任の挨拶をする遠藤学長



本学を後にする遠藤学長

平成23年度弘前大学学生表彰採択一覧

【団体】

体育系課外活動で特に顕著な功績があった学生等

弘前大学医学部サッカー部	・第54回東日本国公立医学生サッカー大会 優勝
医学部バドミントン部	・第41回北日本医科系学生バドミントン選手権大会 女子団体優勝 ・第54回東日本医科系学生総合体育大会バドミントン競技 女子団体優勝 ・第1回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 女子団体優勝、女子ダブルス優勝

特に優れた業績、功績等があったと認められる学生等

農学生命科学部園芸農学科 国際農業食料経済ゼミ	・日本経済新聞社デジタル営業局主催の「社会人基礎力育成グランプリ2012」北海道・東北地区予選大会において「道の駅「サンフェスタいわかみ」における地域農産物を活かしたクレープの商品開発・販売戦略」に関する報告を行い、準優秀賞を受賞した。
----------------------------	--

社会活動及び課外活動で特に顕著な功績があった学生等

弘前大学人文学部 ボランティアセンター (HUV)学生事務局	・2011年4月より、弘前市などが中心となって行ってきた岩手県九戸郡野田村への支援・交流活動において、市民・学生の先頭に立って活動を行った。
teens&law	・青森県更生保護大会において、少年に対する学習・生き方支援活動(BBSともだち活動)に関し、3名の学生が青森保護観察所長表彰を受けた。 ・本学総合文化祭において、幼児虐待をテーマにした模擬裁判を上演し日頃の学習・研究成果を広く市民にアピールした。
弘前大学 グラスハープ・アンサンブル	・県内外で精力的に演奏活動を行った。 ・CD「グラスハープで聴くドリームソングス」をリリースしたほか、「JANU国立大学情報誌」にて活動が報告された。
弘前大学 津軽三味線サークル	・津軽地方の伝統楽器を演奏する団体として、大館市市制六十周年記念事業の公演のほか、県内外で精力的に演奏活動を行った。
弘前大学スティールパン部	・県内外で精力的に公演を行ったほか、CD「スティールパンで聴くあこがれのハワイ」をリリースした。

【個人】

研究活動で特に顕著な成果を挙げた学生等

小野寺 美佳 教育学研究科1年	・日本理科教育学会より「東北理科賞・院生研究奨励賞」を受賞した。
矢野 慎 教育学研究科2年	・日本理科教育学会より「東北理科賞・院生研究奨励賞」を受賞した。

木村 相泰 医学部医学科3年	・第100回日本病理学会学生示説発表において優秀賞を受賞した。
呉 雲燕 (Yunyan Wu) 医学研究科3年	・「癌細胞におけるbHLH型転写因子DEC1およびDEC2の機能解析」の研究で、論文および学会にて発表され、日本病理学会カンファレンスにおいて研究奨励賞を授与された。
大原 悠紀 医学部医学科6年	・「胸腺の肉腫様癌の症例研究」を行ない、第73回日本病理学会東北支部学術集会上において口演発表を行った。
追切 裕江 医学部医学科6年	・「縦隔B細胞リンパ芽球性リンパ腫の症例研究」を行ない、第73回日本病理学会東北支部学術集会上において口演発表を行った。
佐藤 和敏 理工学研究科 博士前期課程1年	・2011年3月ソウル市で開催されたArctic Science Summit Week2011において、「Change in cloud-base height over the ice-free Arctic Ocean during autumn」というタイトルで卒業研究をポスター発表し、「卓越したポスター賞」を受賞した。
三村 直道 理工学研究科 博士前期課程1年	・国内の学会で6件(登壇3件)、研究会で2件(登壇1件)、国際会議で3件(登壇1件)の論文発表があり、際立った活動が認められ、情報処理学会東北支部学生奨励賞を受賞した。
浅井 伸太郎 理工学研究科 博士前期課程1年	・平成23年9月に開催された「平成23年度化学系学協会東北大会」(日本化学会東北支部他共催)において、「アームチェア型カーボンナノチューブセグメント構築を目指した環状アセレン化合物の合成」の表題にて研究成果を発表し、ポスター賞を受賞した。
山崎 祥他 農学生命科学研究科2年	・皮膚の上皮細胞において、Heat Shock Protein40(Hsp40)がケラチンと直接結合し、ケラチンペアーを分子レベルで質的・量的に、そして細胞分化を制御していることを、Western blot 解析、共焦点レーザー顕微鏡による局在性の確認、さらにRNAi実験により論理的に初めて実証した。これらをこの分野の国際誌に筆頭著者として投稿し受理された。(Int.J.Mol.Med.,29,165-168,2012;Impact Factor = 1.814)。
内海 愛里 農学生命科学研究科1年	・ヒトの腺がん細胞(3種)と有棘細胞がん(4種)において、ケラチン分子が細胞侵襲性の本質的な生体機能に関与していることを、ケラチンのRNAi実験、細胞侵襲性解析それぞれにWestern blot 解析により普遍的な特異性を初めて明らかにし、この分野の国際誌に筆頭著者として投稿し受理された(Exp. Therapeutic.Med.,3,443-448(2012))。
金丸 沙樹 農学生命科学研究科1年	・本学設置のさまざまな機器分析装置を用い糸状菌の生産するビスアントラキノン誘導体の構造解析を精密に行い、完全構造を決定する事に成功した。さらに本内容を英文にてChality誌[impact factor 2.892(2010)]に報告、受理された。

特に優れた業績、功績等があったと認められる学生等

中里 広則 (teens&law) 人文学部4年	・学生サークルteens&lawが毎年、弘前大学総合文化祭で実施している「模擬裁判」において、3年連続でシナリオ作成に携わった。
渡邊 健吾 (teens&law) 人文学部4年	・学生サークルteens&lawが毎年、弘前大学総合文化祭で実施している「模擬裁判」において、3年連続でシナリオ作成に携わった。

体育系課外活動で特に顕著な功績があった学生等

松井 喬平 (競技ダンス部) 教育学部3年	・東北学生ダンススポーツ大会 団体戦サンバ 優勝
-----------------------------	-----------------------------

千葉 彩織 (競技ダンス部) 教育学部3年	・東北学生ダンススポーツ大会 団体戦サンバ 優勝
高林 杏奈 (水泳部) 医学部医学科3年	・第54回東日本医科系学生総合体育大会 水泳競技 女子50mバタフライ 優勝大会新、女子200m個人メドレー 優勝
川端 良介 (陸上競技部) 教育学研究科2年	・第64回東北学生陸上競技対校選手権大会 男子円盤投 優勝
高柳 美久 (陸上競技部) 教育学研究科2年	・第64回東北学生陸上競技対校選手権大会 女子4×100mR 優勝
遠沢 和加 (陸上競技部) 教育学研究科1年	・2011日本学生陸上競技個人選手権大会 女子やり投 第2位
工藤 大樹 (陸上競技部) 教育学部4年	・第40回東北学生陸上競技選手権大会 男子400mH 優勝
亀田 亜美 (陸上競技部) 教育学部4年	・第64回東北学生陸上競技対校選手権大会 女子100m 優勝、女子4×100mR 優勝 ・第33回北日本学生陸上競技対校選手権大会 女子100m 優勝 ・第40回東北学生陸上競技選手権大会 女子100m 優勝
木村 美和子 (陸上競技部) 教育学部4年	・第64回東北学生陸上競技対校選手権大会 女子4×100mR 優勝
佐藤 広菜 (陸上競技部) 教育学部3年	・第40回東北学生陸上競技選手権大会 女子三段跳 優勝
木村 綾花 (陸上競技部) 教育学部1年	・第64回東北学生陸上競技対校選手権大会 女子走幅跳 優勝、女子4×100mR(第2走)優勝 ・第40回東北学生陸上競技選手権大会 女子走幅跳 優勝



小向 翔 (柔道部) 理工学部4年	・第28回東北国公立大学柔道大会 男子60kg級 優勝
鎌田 千尋 (医・バドミントン部) 医学部保健学科2年	・第1回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 女子ダブルス 優勝
田澤 彩香 (医・バドミントン部) 医学部保健学科2年	・第1回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 女子ダブルス 優勝
内村 公美 (少林寺拳法部) 人文学部1年	・第44回少林寺拳法東北学生大会 女子段外の部 優勝
小泉 巴 (少林寺拳法部) 理工学部1年	・第44回少林寺拳法東北学生大会 女子段外の部 優勝





人文学部・社会言語学研究室のゼミ生。コーディネーター役に徹し、学生の主体性を引き出すよう気を配った人文学部佐藤和之教授と一緒に

東日本大震災で被災した外国人の無事と安全を願って「やさしい日本語」で続けた支援。

3・11東日本大震災後、およそ50日間。被災した外国人を支援しようと「やさしい日本語」での情報発信に取り組んだのが、弘前大学人文学部・社会言語学研究室のゼミ生です。「何が起きているのか知りたい」「少しでも安全に過ごしたい」という切迫した被災外国人の思いに応え、各地の団体や公的機関と連携した成果に、メンバーは確かな手ごたえを感じています。

いわば、身の安全を確保して生きるためのサバイバル言語

「あの日、弘前で感じた揺れは極めて強いとは言えないものでした。ところが青森県でも全域で電気の供給がストップし、キャンパスの施設は、ほぼ使えない状態に…。地震が起きたことで、あちこちで大変な事態になると即座に気づきました」

3・11東日本大震災が発生した直後を振り返るのは、人文学部社会言語学研究室に集う皆さん。阪神・淡路大震災以来、佐藤和之教授の指導のもとゼミ活動の一環として「やさしい日本語」=Easy Japaneseの研究、普及に取り組んできました。

大地震・大津波をはじめ台風の際の豪雨など。こうした災害に見舞われた外国人へ対し、さまざまな危機対応の情報をスピーディーかつ正確に伝え、安全な状態で生存を図ってもらうためのコミュニケーションツール、それが「やさしい日本語」です。国籍も母語も様々に異なる外国人被災者の立場で捉えると、刻々と移り変わる状況の中、大切な内容を知ることができる「サバイバル言語」です。

減災という考え方に通じる言葉のユニバーサルデザイン

国内には、英語を理解できる外国人だけが飛び抜けて多く住んでいるわけではあり

ません。アジア・中近東・東欧・アフリカ・中南米のような非英語圏から訪れているケースも目立ち、むしろ多国籍化、多文化共生という状況にあります。

また災害が起きて混乱した状況下、英語だけでなくフランス語やドイツ語、ロシア語、さらに中国語、韓国語といった複数言語で情報伝達を行うことは翻訳に携わるマンパワーの確保、対応できるスピードの面で、かなりの困難が伴います。そこで外国人に限らず子ども・お年寄り・障害者など、情報弱者になるリスクが高い人たちにとっても有効な情報言語として「やさしい日本語」が活用されます。その体系は「言葉のユニバーサルデザイン」というコンセプトに基づきます。さまざまな危険から身を守り、被災を最小限に抑える減災という発想が盛り込まれ、被災者の心の不安を軽減したり、困り事を解消したりするのに役立ちます。

来日して1年ほどの外国人が日常生活のレベルで使える日本語は、およそ2500語です。これらを用い、緊急性・重要度の高い事柄に限って情報を発信します。たとえば[危険→あぶない]、[警戒する→気をつける]というように平易な日本語への言い換え表現に気を配り、できる限りシンプルな構造の文を作成します。いざという時、外国人には、そういう表現が分かりやすく役に立ちます。

卒業生もメンバーに加わって3月14日までは体制整備

2011年3月11日。マグニチュード9.0の巨大地震が発生したとき、佐藤教授は、たまたま出張で東京都内に。交通網がマヒして帰宅困難者になったものの、翌日、すべてのゼミ生へメールで安否を確認するとともに、次のような内容が伝えられました。

「このたびの地震や津波に遭い、いろいろ困難な状況に置かれている外国人の皆さんが大勢います。いろいろな必要とされる情報を「やさしい日本語」で届け、災害支援を始めていきましょう。3月14日(月)の朝までには、全ての支援体制を整えます。日本語資料実習室が活動の拠点です」

佐藤教授の呼びかけに応え、春休み返上でゼミ生が集まりました。当時の3年生に交じり、新学期から正式配属となるはずの2年生も顔を揃えました。こうした後輩たちの取り組みを応援しようと、若い世代の卒業生も駆け付けました。原文から「やさしい日本語」への翻訳スキルを発揮し、貴重な戦力となりました。現役学生へのアドバイスや、精神的なサポートにも努めるなど雰囲気盛り上げたのでした。

国際交流団体やNPOと連携して案文づくり、イラスト作成

災害情報を「やさしい日本語」に翻訳したり、ポスターという形に視覚化する作業に携わったのは、現役学生と卒業生の合わせて22名。ローテーションが生まれ、活動拠点には3人が常駐するようにしました。このような態勢を取り、各地の国際交流団体やNPO、行政機関から電子メールで寄せられる要請に対応。ラジオ、自治体の防災無線といった音声メディア向けの案文を作成したり、シンプルなイラストを通して要点が伝わるような掲示物の制作を手がけました。

また「やさしい日本語」の各種ポスター、

災害情報コーナーを研究室のホームページへ開設して小まめに更新。さまざまな支援を行う側、さまざまな支援が必要な側、それぞれのニーズに即してサバイバル言語が活用されるよう、広く社会への情報発信に努めました。

ホームページへのアクセスは3月14～20日は連日3000件近く、続く3月21～27日は、1200件前後の日が続きました。震災発生から日が浅いほど多くなっています。その後は減少傾向に転じますが、大きな余震が起こるごとにアクセス・ページビューともに増加する傾向にありました。さらに震災のダメージへ追い打ちを掛けるように、原子力災害が発生。公的で信頼に足る外国語による情報が世界へ発信されない状態が続いた影響なのか、アメリカ・フランス・タイ・オーストラリアといった国からのアクセスが増えた点も注目しています。

地震や津波で通信インフラが壊れ、パソコンを使えない被災地の状況も考慮しました。少しでも手軽に情報を得られるよう、携帯電話向けのサイトを開設しました。

すみやかに、やさしく、正確に…あいまいな表現は許されない

「やさしい日本語」へ翻訳する原文が送られてくるのは、連日、18:00～19:00ごろ。実習室で待機していたメンバー全員で読み合わせ、内容をチェックした後、官公庁のホームページなど公的で信頼性の高い情報ソースへアクセス。伝える情報の信ぴょう性を確認するなど、裏づけ作業を経て案文を作成しました。あいまいな表現は厳禁。文脈に即してニュアンスを把握、それを平易に表すのは神経をすり減らす作業です。

「やさしい日本語」について詳しい弘前大学人文学部社会言語学研究室のホームページアドレス
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/index.html>

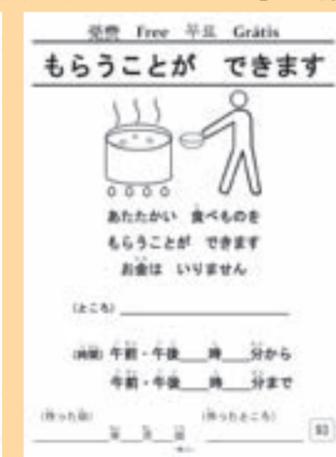


「やさしい日本語」について、社会言語学研究室の活動をアピールする掲示板

「災害が起こったときに外国人を助けるためのマニュアル」の一部



日用品の用意を呼びかける



炊き出しがあることを知らせる

弘前大学では雑誌6誌に広告を掲載し、それに連動して特設WEBサイトを開設しました。



少年マガジン
文学部 日比野 愛子先生



TVぴあ
教育学部 武内 裕明先生

弘前大学の魅力を全国に発信するために、本学では、雑誌6誌(少年サンデー、少年マガジン、TVぴあ、TVガイド、ザ・テレビジョン、TVブロス)への広告掲載を行いました。

また、雑誌広告への掲載と合わせまして、WEB上でも各誌に出稿した本学の広告内容を公開しております。



Web版は、こちら
左のQRコードからも
ご確認できます。

●Webアドレス(PCサイト)

弘前大学の誌面講義《特設Webサイト》

http://www.hirosaki-u.ac.jp/koukoku_2012/index.html
(通信料は各自の負担となります)



少年サンデー
医学部(医学科) 高橋 一平先生



TVブロス
医学部(保健学科) 對馬 均先生



ザ・テレビジョン
理工学部 吉澤 篤先生



TVガイド
農学生命学部 園木 和典先生

弘前大学メールマガジン 「ひろだいメルマガ」会員募集のお知らせ

弘前大学メールマガジン「ひろだいメルマガ」では、弘前大学への理解を深めてもらうことを目的として、最新の情報をメールで配信しています。

登録は簡単に出来ますので、配信を希望される方は、下記URLより是非ご登録ください。購読は無料です。(登録はパソコンのアドレスをお願いします。)

「弘前大学教員紹介シリーズ」

弘前大学に在籍する先生の、研究内容はもちろん、趣味など、普段の授業では聞かれない情報も紹介します。

「今、この部活動・サークルがおもしろい」

学生記者がイチオシの部活動やサークルの活動内容などを詳しく紹介します。

「講演会・セミナー等のお知らせ」

予定されている講演会やセミナー等のスケジュールを紹介します。

詳細は、下記URLをご確認ください。



ひろだいメルマガ <http://db.jm.hirosaki-u.ac.jp/magazine/>

ひろだい vol.18

2012年3月発行

弘前大学総務部総務課

表紙：手術支援ロボット「ダ・ビンチ」

「ひろだい」に関するご意見・感想をお聞かせください。
「ひろだい」はWebでもご覧いただけます。
下記URLからお進み下さい。



〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
Tel.0172-39-3012 Fax.0172-37-6594
E-mail : jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp
<http://www.hirosaki-u.ac.jp>

